

アニメの聖地巡礼と災害支援—茨城県大洗町の「ガルパン」文化を事例に—
 The Real-life Locations of the Animation and Restoration Assistance~the Case of "Garupan" Culture in Oarai
 Town Ibaraki Prefecture~

○李勇昕・矢守克也

○Fuhsing LEE, Katsuya YAMORI

To build the balance between disaster affected area and outside supporters is difficult. To counter this problem, we conducted a study about how the residents create a deep and unique culture with the animation fans in Oarai town, Ibaraki prefecture. The fans of Animation "Girls and Panzer" has visited Oarai town from 2012. They brought Oarai town a great economy effect. At the same time, fans also conducted the volunteer work in Oarai town. They even supported the residents when residents went to support the other town which affected by Typhoon Hagibis in 2019. We found fans tried to create a long term relationship with Oarai town , and residents lead the fans action strategically.

1. アニメ聖地巡礼と被災地支援

災害復興、地域おこし、まちづくりにおいては、地域住民の力だけでは足りず、どうしても外部支援に頼る必要もある。しかし、住民と外部支援者との関係性の構築には、数多くの課題も存在している。たとえば、外部支援者が支援に力を入れすぎると、住民が支援に依存し、住民の主体性が奪われるといった弊害も生じる。両者の関係をどのように構築し、また変化させていけばよいのか、それはけっして簡単な課題ではない。

本発表では、以上の課題について、東日本大震災の被災地である茨城県大洗町の復興過程を事例として取りあげる。大洗町は震災後、風評被害に悩まされていたが、アニメ作品「ガールズ&パンツァー」（以下「ガルパン」）のファンによる「聖地巡礼」が大きな役割を果たし、災害復興や町の再活性化を後押しした。さらに、2019年台風19号では、ファンが大洗町に支援し、大洗町が他地域への支援活動を支援することもある。住民とファンの間は、どのように関係性を構築できたのか、大洗町の「ガルパン」文化はどのようなものなのか、判明していきたい。研究方法は、インタビュー調査および参与観察である。研究期間は2012年年末から現在に至る。

2. 大洗町と「ガルパン」

大洗町は、人口約1万7千人、海からの豊富な資源を活かし、観光業（海水浴、宿泊、売店、食事など）や漁業などを主な産業とする町である。近年、人口の高齢化に伴う活力の低下や産業の首

都圏への依存が高いために町内の産業連携が弱い点等が問題視されている。東日本大震災以降、同町が苦しんだのは、東京電力福島第一原子力発電所事故による原子力災害への不安、および原子災害がもたらした風評被害である。

「ガルパン」は、2012年10月から同年の12月までと2013年3月にテレビ放映されていたアニメ番組である。同アニメがテレビで放映されて以来、日本各地、海外のファンが「聖地巡礼」と称して大洗町を訪問している。「聖地巡礼」とは、ファンがアニメの舞台となった実際の場所を訪れることを意味している。この「聖地巡礼」は大洗町の商店街、宿泊業者に大きな経済効果をもたらした。

ファン側は、大洗町側より活動の内容が豊富である。主に20代以上の男性が多いとみられる。ファンの行動は、撮影、スタンプラリー、ガルパン関連グッズの買い物など「観光消費」がある。また、祭り、キャラクターの誕生日会などの「イベント」に参加する。コスプレ、同人誌、観光マップづくり、絵馬、ノートに絵を描くなどの「交流」を行う。ファンのなかには自分で購入したアニメ関係のグッズを無料でお店あるいは大洗町のほかの場所に置く人もいる。また、無償でお店の掃除、手伝い、メニュー作成、商売に関するアドバイスを提供するファンもいる。単純に商店街の経営者と長時間雑談することを楽しむファンもいる（図1、図2）。

興味深いのは、ファンは、「ガルパン」とは関係しないこと、たとえば町民の海岸清掃の日にファ



図1 大洗町の商店街とファン



図2 ファンがイベントの参加の風景

ンがボランティアとして手伝いに来ることもある。あるいは、単に地元のイベント、たとえば100円商店街、消防団の操法大会に駆けつける。

また、筆者が現地で主催する防災ワークショップ、防災シンポジウムにも参加し、積極的に発言する。筆者は、2018年5月26日・27日に茨城県大洗町で「大洗町と高知県黒潮町との交流勉強会」を開催した。その直後、高知県出身のガルパンのファンF氏が筆者に訪ねた。F氏自身が開催予定の高知県の「ガルパン」関連イベントで、「防災勉強交流会 PR トークショー」を取り組んだ。2019年1月26日に、高知駅の広場で、筆者および大洗町観光協会会長O氏が100名のファンの前で、大洗町の震災経験および防災活動について語った。F氏は、翌日に、高知県黒潮町に駆けつけて、筆者主催の第2回「大洗町と黒潮町の防災勉強会」に参加し、高知在住の「ガルパン」ファンの行動について発表した。

2019年台風19号の際に、大洗町商工会青年部

が同県の大子町に災害支援を行った。F氏は募金や支援物資を青年部に渡した。その理由について、青年部の活動を応援したいためである。大洗町も黒潮町の住民は、「ガルパン」のファンの行動力に感心したと述べた。

他方で、住民側は、大洗町商工会を筆頭に、町の「ガルパン」文化をリードしている。商工会のメンバーは、アニメ制作者とファンとは頻りにコミュニケーションを取っている。大洗町観光協会会長は、大洗町が盛り上がる理由について、以下の4点を挙げた。第一に、アニメがヒットしたことガルパンファンが礼儀正しくマナーが良く町に受け入れられたこと。第二に、キーマンとなるべき人があるべきポジションに揃っていたこと。第三に、商店街のおじちゃんおばちゃんがファンと心通わす交流をはじめたこと。第四に、制作陣も地元サイドと対等にお付き合いをしてくれたこと。

3. 「ガルパン」文化

ファンは、単に1回2回大洗町を「巡礼」し、次のアニメを舞台にする他地域へ行くのではなく、大洗町の商店街で地域住民と長く付き合う。さらに、災害支援活動、町の防災活動に参加する。ファンは、単に観光客でもなく、すでに外部支援者の立場になっている。他方で、地域住民は、単にファンの消費行動に合わせて、アニメ関連の商品を販売することではなく、意図的にファンの地域参加をリードしている。たとえば、アニメとは関係していないイベントを開催したり、あるいは災害支援に関する情報をファンに伝わったりしている。

もちろん、大洗町の「ガルパン」の取り組みは、震災復興、災害救援を意識しながら互いに支援しあう住民やファンはほぼいないと考えられる。しかし、住民とファンの間には、すでに復興、防災の取り組みにおける当事者と外部支援者の関係性の可能性を構築した。「ガルパン」文化は、住民が主体的に作り出した町と外部者のコミュニケーションの空間である。ファンは、アニメとは関係ない防災・復興の活動を参加することで、地域との関係性を深まることができる。また、この空間において、住民は改めて町の復興・防災を見つめ直す機会になりうる。